

では、テモテへの手紙第 1 をお開き下さい。今日からテモテへの手紙第 1 を始めていきます。このテモテへの手紙は牧会書簡、牧会の手紙というものに分類されます。他にもテモテ以外にテトスへの手紙もこの牧会書簡に分類されます。牧会ということは、牧師に宛てられている、牧師の仕事を主に扱っている手紙ということです。「それじゃあ、私は牧師じゃないから関係ありません。」というふうに思わないで下さい。全てのクリスチャンは牧会的なミニストリーに召されております。牧会的なミニストリーとは一体何なのか。平たく言えば、牧会と言え、羊飼いの仕事をするということです。羊飼いとというのは、御言葉によって羊を養うという働きを主たる働きとします。皆さんも神の言葉を今まで学んで来たわけ。神の御言葉によって霊的に養われて来たわけ。皆さんもこの神の言葉を持っているわけ。それをもって他の人たちに、御言葉を必要としている人たちに、分かち合うということ、分け与えるということ、御言葉を教えてあげるとのこと、特に若い世代に対して、まだベビークリスチャンという未熟なクリスチャンたちに対して、皆さんもまた既に御言葉を学んで来た者として、教えるという働きに召されております。ですからこれは牧師の専売特許ではありません。勿論牧師はこの召しのために、この牧会のミニストリーのために、特別に召されてはいます。ただクリスチャンは全員、時が良くても悪くても御言葉を宣べ伝えるようにと、この手紙の中にもそのことが言われています。第 2 テモテに出て来ます。ですから全員が全員、クリスチャンならば、牧会、ミニストリーに召されているということです。ですから決して牧会書簡は、「牧師でない私に関係ない」というふうに思わないで欲しいと思います。

また同時にこの牧会書簡を通して、牧師とはどういう人なのか、牧師のあるべき姿、また牧師の働き、牧師の仕事、牧師のミニストリーとは如何なるものか。それがこの手紙を通して教えられるところであり。そうすると皆さんは、もっと牧師のために祈ろうと思えますし、もっと牧師を愛そうと思えますし、牧師の働きを理解して、そして牧師の働きをサポートするという、そういう思いにも駆られると思えます。ですからこれを勿論第一義的には牧会の働きに携わっている、直接献身している牧師たちにも教えたいところですが、それ以外の牧会される者たちにも是非、牧師の真の姿、牧師の真の働き、これを知っていただいて、益々皆さんの牧師を愛して欲しいと思えます。皆さんは私のことを愛して下さいますが、このメッセージを聴いているのは、皆さんばかりでなく、インターネットを通じて聴いている人たちもおります。また CD で聴く人たちもおりますので、そういう人たちにも語りたくと思えます。皆さんの牧師をもっと愛して欲しいと思えます。その働きを理解した上で、効果的な援助をして頂きたいと思えます。もっと尊敬して、リスペクトして頂きたいと思えます。勿論彼らはそれを望んでいるわけではありませんが、ただそのことによって教会は益々元気になります。ですから皆さんの羊飼いが元気ならば、当然その羊たちも元気になるのは**ひつじょう**必定であります。で、先程も冒頭で触れましたように、このテモテへの手紙第 1・第 2 は、パウロの最晩年の手紙となっております。おそらく第 1 テモテは AD66 年頃に書かれたと言われてます。第 2 テモテの方は翌年の AD67 年頃に書かれたと言われてます。で、その翌年 AD68 年にはパウロは皇帝ネロによって迫害を受け、そして断首刑となっております。首をはねられております。ですから本当に殉教する直前、数年前にパウロはこの手紙をテモテへ宛てたわけ。最期のお別れのメッセージ。遺言状と言っても差し支えありません。で、そのテモテという人物はエペソ教会の若き牧師でありました。**第 1 テモテ 1:3** のところに『あなたは、エペソにずっととどまっています』とあります。パウロがテモテに対して、あなたは、エペソにずっととどまっています、そこでエペソ教会を牧会するようにと命じとり。第 1 テモテ 4:12 には、『年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえっ

て、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい』と。テモテの年が若いということが分かります。若き牧師です。ですからテモテへの手紙をテモテへ個人的に宛てた手紙と見るならば、主題聖句は今読み上げた**第1テモテ4:12**になると思います。でもこれを教会全体の牧会的な働き、ミニストリーに対して宛てた手紙と見るならば、**第1テモテ3:15**がこの手紙の主題聖句となろうかと思えます。『それは、たとえ私がおそくなった場合でも、神の家で（つまりエペソの教会で）どのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。（テモテが知っておくべき事、牧会者として知らなければならぬ事、牧師の仕事とは何か。そのことがこの手紙の中にまとめられています。）』**『神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。』**と。テモテという牧師に焦点を当てるならば、主題聖句は**第1テモテ4:12**となります。また牧会の働きというミニストリーに焦点を当てるならば、主題聖句は**第1テモテ3:15**になろうかと思えます。で、この手紙の宛先であるテモテについては、先程も触れましたように彼の年はまだ若かった。他にも第2テモテの方では、テモテはちょっと弱々しかった、おくびようだった。ちょっとしたことでびくついてしまう。ちょっとしたことで落ち込んでしまう。すぐにながかりしてしまう。そんな弱々しい性格だったということも、知らされています。**第2テモテ1:7**にこうあります。『**神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。**』ここから示唆されることは、テモテはおくびようだったということです。すぐに恐れてしまう。そういう弱さを抱えた若き牧会者だったということです。聖書の中にも、神の聖徒たちも度々「恐れるな」と言われています。偉大な信仰者たちも、何度となく『**恐れるな、たじろぐな、雄々しくあれ**』と言われています。ですから、どんなクリスチャンでも勿論パウロも含めてですが、恐れを抱いてしまうものです。怯えてしまうものです。時におくびょうになってしまうこともあります。ですから常に私たちは励まされる必要があります。パウロはテモテに対して励ます目的でこの手紙を書いたんです。最期の言葉として、言い残すことが無いように。この若き牧会者を奮い立たせて、自らの後継者として、強めるために、活躍してもらうために、後を任せていくことが出来るように、奮起するように、と書いてこの手紙を書いたわけです。年が若くても神様は用いて下さいます。聖書の中にもたくさんの若者たちが神の栄光のためにその能力を超えて力強く用いられています。ダニエルもそうでしたし、エレミヤもそうでしたし、「若いと言うな」と。神が用いられます。「まだまだ経験不足で」と言っただけじゃありません。「私は弱いですから、おくびようですから、怖がりですから、すぐに恐れをなしてしまうので、すぐに落ち込んでしまうので、すぐにながかりしてしまうので、私のような者は用いられない」と思わないで欲しいと思います。テモテでも用いられたということを知っていただきたいと思えます。それに加えて、テモテは肉体的にも弱かったということです。精神的にも、感情的にも、弱さを露呈したテモテであったわけですが、彼の肉体も弱かったということです。虚弱体質だったということも知っていただきたいと思えます。これは**第1テモテ5:23**にあります。『**これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。**』この”少量のぶどう酒”というのは、水割りのワインのことです。テモテの体質は胃弱だったということです。ですから、当時の胃薬として使われていたのが、水割りワインでした。それによって胃腸の働きを整えて、要するにテモテは「胃腸薬を飲みなさい」と、現代風に言えば、パウロはテモテにアドバイスしているわけです。パウロは不治の病を抱えている病人たちを奇跡的に癒やすこともしました。当然テモテのためにも何度となく祈ったはずで、癒やされるように。このような肉体的なハンディキャップを背負っては、神の偉大な働きを担うには、重すぎると、大変だと、何としてでもテモテは健やかになって、元気になって、もっと神に力強く、効果的に用いられるように、癒やしをパウロも願ったと思います。でも癒やされなかったわけですが。それはパウロにしても然りです。パウロにも肉体の棘とげというものがありました。三度も「癒やして下さい」と神様にお願いしましたがけれども、でも、『**私の恵みはあなたに十分である**』ということで、パウロは敢えて癒やされないことを受け入れて、そして自分の弱さ

のうちにキリストの力が完全に現れることを経験して、そして肉体の棘をかえって感謝としたわけです。テモテも同じようだったと思われます。ただしテモテは、薬を、水割りワインを飲まないでいたりして、胃を悪くして大分体調を崩してしまったようです。ですからそんなテモテに対して、「あなたは薬を飲んでもいいんだ」と。勿論私たちは先ず第一に神様に祈って、薬に頼る前に、医者に頼る前に、真っ先に神に癒やしを求めるべきです。でも神様の癒やしの方法は私達には決めることはできません。奇跡的に、超自然的に癒やすということも神様はなさいますが、医者の手を使って、医療を使って、薬を使って、治される。それも神様の方法であります。ですから聖書にはちゃんと薬も服用して、これも神の癒やしの方法であるということを示唆している箇所は一杯あります。オリーブ油を塗るとか、それも一つであります。当時の医薬品であります。ですから皆さんも誤解しないで、偏らないで頂きたいと思います。「何でもクリスチャンは信仰によって、神様に直接癒やして頂かなければいけない。医者に頼るのは不信仰だ。」とか、そのように思っただけではありません。バランスが大事だと言うことです。そのようにしてテモテは年が若いにもかかわらず、また精神的な弱さを抱えているにもかかわらず、また肉体的な弱さを抱えているにもかかわらず、パウロの強力なパートナーとして、アシスタントとして、パウロの後継者として、用いられていたわけです。このように神様は、弱い者、愚かな者、取るに足らない者を、無に等しい者を召して、神の栄光のために力強く用いて下さるということを知って下さい。能力者ばかりを用いるのではありません。資格者ばかりを用いるのではないのです。この人はとても牧師としてはふさわしくない。勿論聖書にはちゃんとその資質というものリストアップされてますから、その資質は最低限クリアしなければいけないわけですが、もっとふさわしい人が他にいないかと思われる時でも、「若い人よりももっと熟練した人、社会的経験の豊かな人、そういう人が牧師になるべきじゃないか。そういう人が神に用いられるんじゃないか。」とか、「もうちょっと精神力の強い人、そういう人の方がふさわしいのではないか。」とか、「そんな虚弱体質の人では、とても牧会なんか務まらない。だからもっと元気な人じゃないと。肉体的に強い人でないと牧会の働きは務まらないのではないか。」と、私たちはそのように人間的な尺度でとらえようとしますが、必ずしも神様はそのような強い人ばかりを用いるのではありません。弱い人でも神は用いて下さいます。それでも、テモテはパウロによって「神の人」と呼ばれてます。**第1テモテ6:11**。『しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。』聖書の中で”神の人”と呼ばれている人物は、ほんの一握りしかおりません。滅多にいません。テモテは若くても、おくびょうでも、胃が弱くても、それでもパウロの口から”神の人”と呼ばれています。また弱くてもテモテは実に忠実で有能な人物であったということも**第1コリント4:17**の、そういったところからも知ることができます。

そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。彼は、私が至る所のすべての教会で教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。(第1コリント4:17)

まさにテモテはパウロのコピーだったということです。パウロと同じメッセージを語り、パウロと同じライフスタイルを持っていた。ただ同じ教えをしているだけじゃなくて、同じ生き様を持っていた。同じライフスタイルを持っていた。教えている通りに生きていた。模範的な信仰者であるということです。ですからパウロはテモテに全幅の信頼を置いて、そして後継者としてテモテを選んだわけです。パウロとは違うことは教えなかったんです。パウロとは違うライフスタイルは持たなかったんです。こういう人が神に用いられます。**ピリピ2:20~22**もお読みしたいと思います。これもテモテに関する記述であります。

20：テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。

パウロと同じ心を持って教会員たちのことをケアしたということです。そして 21 節に、

21：だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。

22：しかし、テモテのりっぱな働きぶりは、あなたがたの知っているところです。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。

若くても、おくびょうでも、胃弱でも、それでもテモテは立派に働いたということです。子が父に仕えるように忠実にその務めを果たしているということです。これが、テモテが優れていた点であります。年齢において、経験においては決して優れてはおりませんでした。また感情面においても、大胆というよりもおくびょうな性格でありました。体力面においても、胃が弱くて、薬を飲まなくてはまともに生活も出来ないような、そういう弱さも抱えておりました。しかしテモテは“神の人”と呼ばれたんです。なぜ彼が“神の人”と呼ばれたのか、今読んだ箇所を見れば、お分かりになるかと思います。彼は忠実な者だったということです。従順な者だったということです。パウロというリーダーの言うことに対して、忠実に従い、その模範に忠実に倣おうとしたわけです。で、勿論パウロがモデルにしていたのはイエス・キリストであります。ですからテモテがパウロに倣うということは、同時にイエス・キリストに倣うことを意味していたわけです。イエス・キリストが教えた通り。イエス・キリストが生きたようにパウロは模範を示していましたから、そのパウロにテモテは倣ったわけです。

また他にもテモテについて情報があります。お母さんの名前がユニケとあって、おばあちゃんの名前はロイスといます。これは第2テモテ 1：5 に出て来ますから、その際にも詳しく解説したいと思います。

私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。(第2テモテ 1：5)

彼女たちは、ユダヤ人の女性です。そしてイエス・キリストを信じてテモテを若い時から、幼い時から聖書をもって教育してきた非常に敬虔な婦人たちであります。お母さんユニケ、おばあちゃんロイス。おばあちゃんとお母さんからキリスト教教育、聖書教育を受けてきたということです。テモテのお父さんはギリシヤ人です。使徒の働き 16：1 にそのことは言及されています。

それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、(使徒の働き 16：1)

ですからテモテは、父をギリシヤ人とし、母をユダヤ人とする所謂ハーフだったということです。しかし母ユニケと祖母ロイスは、イエス・キリストを信じる“ユダヤ人クリスチャン”だったわけです。この敬虔な二人の女性を通して幼い頃から聖書に親しんで来たということです。パウロも第2テモテの方でそのことを言及しています。ですからテモテはユダヤ人にも効果的な働きをなすことが出来、同時にギリシヤ人に対しても、異邦人に対しても接点を持つ者でありました。そういう意味においても、パウロの後継者としてふさわしかったわけです。そしてパウロが第一回伝道旅行の際、宣教旅行の際、恐らくテモテの母ユニ

ケと祖母ロイスの家に滞在して、その滞在期間中に、テモテはその頃恐らく10代だったと思われます。パウロを通してイエス・キリストを信じる信仰告白をして、まさにパウロがテモテの霊的父親となったということを示唆するような箇所もあります。それは**第1テモテ1:2**、『**信仰による真実のわが子テモテへ。**』とあります。こういったフレーズからテモテは、直接パウロから福音を聴いて、そして信仰告白に至ったということが分かります。勿論もっと幼い頃から、お母さんとおばあちゃんから聖書は教えられて来たと思いますけれども、あらためて10代の頃、ティーンエイジャーの時にこのパウロという偉大な宣教師を通してハッキリとイエスに対する信仰を表明したということです。他にも同じく**第1テモテ1:18**、『**私の子テモテよ。**』という言葉があります。繰り返しパウロは、他の手紙でもそうですけど、テモテのことを”我が子”と呼んでいます。真実な我が子。忠実な我が子と。信仰による我が子というふうと呼んでおります。ですからテモテにとってパウロは父親のような存在だったということです。本来父親は子供にとってモデルとなるべき存在です。「お父さんのようになりたい。」まさに子供からしたらヒーローです。父親というのはまさにそのような存在でなければいけません。子供が見上げる存在。「お父さんのようになりたい。」自分のモデルです。自分の英雄です。お父さんにこのことをチャレンジしたいと思います。あなたの息子、娘は、あなたのことをそのように見上げているのでしょうか。それとも逆に「お父さんのようにはなりたくない。」まあ、反面教師というのも一つの役割かもしれませんが、そのような開き直りはやめて欲しいと思います。パウロは、「私を見なさい。私に倣いなさい」と。それが本来の霊的リーダーの言うことであります。当然牧師も同じです。教会員から見て「あのようなクリスチャンになりたい」と。もし牧師を目指す者があるならば、「あのような牧師になりたい」と、そのように思わせる者でなければ、模範的な存在でなければ、または英雄的な、ヒーロー的な存在でなければなりません。ただ、だからといってパウロは決して格好が良かったんじゃないんです。皆さんもパウロのことはある程度知っていると思います。パウロの見た目は貧弱でした。弱々しかつたと、コリントの手紙からもそのことがうかがい知れます。確かに彼は病弱でした。弱視でもありました。しかも伝承によるとパウロの鼻はユダヤ人特有の”かぎ鼻・わし鼻”でそして背中が曲がっていたとも言われます。びっこも引いていたんじゃないかとか。パウロの身体的特徴があまり良いものではなかったという、そういう記録も残ってます。禿げ上がっていた。ヨボヨボだった。そういう人がなかなかヒーローとはみなされないかもしれませんが、テモテにとってはパウロは自分の父親のような存在、英雄だったわけです。見た目からじゃないんです。ですから皆さんも見た目で人を引きつけるんじゃなくて、見た目で人にアピールするんじゃなくて、パウロと同じようにその信仰において、その霊性において、模範となって頂きたいと思います。

で、第2回伝道旅行にパウロはこのテモテを連れて行きます。同労者として、アシスタントとして、片腕として。で、第3回伝道旅行にもパウロはテモテを連れて行きます。パウロのお気に入りであり、パウロが心から信頼していた弟子だったわけです。パウロの書いた書簡、13ありますけれども、そのうちの6通にテモテの名前が共同執筆者として挙げられています。共同の送り主としてパウロとテモテ、他にもシラスとかシルワノという人物も挙げられたりしてありますが、6通の手紙にパウロとテモテ、連名で出てきております。第2コリント、ピリピ、コロサイ、第1・第2テサロニケ、そしてピレモンへの手紙。これら6通の送り主はパウロだけじゃなくてテモテもそこに含まれているということです。そしてこのテモテはパウロの後継者としてエペソ教会の牧師として任命されたということでもありますけれども、教会のイメージを今皆さんに正しく持って頂きたいと思います。当時の教会というのは、まだいわゆる礼拝の専門施設を持つような組織化された教会ではありませんでした。一世紀の教会というのはほとんどが家の教会だったわけです。それぞれの家に集まっていたわけです。ですから専門の礼拝施設に大勢が一堂に会して集まるというよりも、あちこちの家の教会に小グループで集まって、そしてまたそのような教会がパウロの手紙を回覧板のようにして回して、教えを受け、励ましを受け、そしてそこに巡回伝道者という人たちもま

わりながら、教育をしていったわけです。で、それが後に発展して今日のような教会に形成されていったわけです。ですから、エペソ教会と言ってもそこに一つの大きな教会があったというよりも、エペソの街に複数の教会が点在していたということです。家の教会のようなイメージを持って頂きたいと思います。

**使徒の働き 20：17**（パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。）にも、これは開かなくても結構ですが、パウロがエペソを去るに当って、最期にお別れのメッセージをエペソの長老たちに、教会のリーダーたちに語ります。そこで”長老たち”という言葉が注目に値します。エペソの教会の”長老”というよりも、”長老たち”ということは、エペソには複数の群れがあって、それぞれに長老と呼ばれるリーダーが立てられていて、ですから複数の長老たちがいるということは、複数の家の教会がそこにあったということです。それを含めれば、合計すれば、恐らく数百人の規模にはなっていたと思います。それらの家の教会のすべてを管轄し、監督するべく、パウロはテモテをそこに置いたということです。ですから一つの教会の若き牧師というよりも、むしろパウロの後継者でしたから、パウロと同じような働きをするべく、複数の小グループを、家の教会のような小さな群れをまとめて、そこに立てられている長老たちも指導しながら、まとめていたという、非常に重い責務を負っていたということです。ですからパウロのような使徒的な働きをしていた。重い責任、また大きな権威を持って、テモテは働いていたということです。その責任があまりに大きいので、若いテモテ、おくびょうなテモテ、虚弱体質のテモテは、ちょっと恐れてしまったわけです。あまりの重責に、プレッシャーを感じてしまったわけです。実際にパウロの宣教活動の中でエペソは最大の働きをしたところです。エペソにはパウロは3年間もとどまったんです。これは他に類を見ない事です。ですからエペソというのは、パウロが最大の働きをしたところで、そこにこのテモテを置いたわけです。これは大きなプレッシャーです。パウロという偉大な宣教師の後を継がなければいけない。パウロが行ったミニストリーの中で最大のミニストリーを引き継がなければならぬ。これは大きなプレッシャーです。でもそれだけパウロの信任が厚かったとも言えます。例え若くても、例えおくびょう者でも、例え虚弱体質でもです。でもやっぱりグラつくことがあるわけです。恐れをなしてしまうこともあるわけです。プレッシャーに押しつぶされそうになることもあるわけです。あまりの重圧、あまりの重責。また反対者、迫害者もそこにいたわけです。そんなテモテを励ます目的でパウロはこの手紙を書いたのです。牧師も励まされる必要があります。是非皆さんの牧師に励ましの言葉をかけてあげてください。私にもお願いしたいと思います。また他にもこのメッセージを聴いている方で、CDやインターネットで聴いている方、あなたの教会の牧師を励ましてあげて頂きたいと思います。彼らもまた弱いんです。彼らもまた若いんです。若いというのは年齢ばかりではなくて、まだ牧会経験が未熟という人もあるでしょう。ですから容易に裁かないで下さい。彼らもまた成長する余地があるんです。牧師たちも成長するんです。あなたが成長するように、牧師も成長するんです。牧師は完璧な者ではありません。完成者ではありません。みんながみんなキリストの似姿に変えられていくべく、ここに置かれているわけです。切磋琢磨しながら、互いに教え合いながら、互いに励まし合いながら、戒め合いながら、主のしもべとして、同労者として、同じ兄弟姉妹として、置かれているということです。是非励まして頂きたいと思います。

今お話したようなことが、この手紙の背景ということで、序論の部分ですね。大体皆さんもこの手紙をこれから学んでいく上で、必要最低限の情報を今、耳にされたと思います。また、本文に入る中でおいもうちょっと踏み込んで、背景のことも、執筆事情というものを、そういったこともまた触れてきたいと思います。

で、アウトラインですけれども、アメリカの著名な聖書教師ウォーレン・ウエスビーという人が非常に分かりやすいアウトラインをしていますので、それを皆さんに紹介したいと思います。先ず1章は『教会とそのメッセージ』。英語では”The church and its message.” 2章・3章は『教会とそのメンバー』。

”The church and its members.” もうお分かりだと思いますが、メッセージ、メンバーと“M”で始まります。で、4章は『教会とそのミニスター』。ミニスター“というのは日本語に訳すと”聖職者“とかプロテスタントでは”教役者“という人たち、いわゆる牧師のことです。でもこれも”M“で始まっています。”The church and its minister.” で、最後の5章・6章は『教会とそのミニストリー』です。”The church and its ministry.” というふうにしてアウトラインを敷くことが出来ます。メッセージ、メンバー、ミニスター、ミニストリー。ミニストリーは文字通りは、”仕えること“です。ミニスターも文字通りは”仕える者“を指しています。奴隷というふうに訳しても差し支えない言葉です。すべての聖職者、すべての教役者、すべての牧師は、キリストのしもべ、教会のしもべであります。偉い人じゃないんです。むしろイエス・キリストが仕えられるためにこの世に来られたのではなくて、仕えるために来られたと言われる大牧者に倣うのが小さな牧師たちです。牧師たちも仕えられるために教会に置かれているわけではありません。むしろ教会に仕えるために牧師は置かれとります。ですから私は”牧仕“という言葉を造語して、牧会の”牧“に対して、教師の”師“ではなくて、奉仕の”仕“を使っております。それが本来の牧師の姿と言えらると思います。

で、次に早速本文に入って行きたいと思いますので、第1テモテ1:1を見て下さい。

1: 私たちの救い主なる神と私たちの望みなる（希望なる）キリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから、

“私たちの救い主なる神”という言葉は、結構珍しい表現と思われれます。ただ、このテモテへの手紙の中では第1テモテ2:3（そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。）、第1テモテ4:10（私たちはそのために労し、また苦心しているのです。それは、すべての人々、ことに信じる人々の救い主である、生ける神に望みを置いているからです。）、テトス1:3（神は、ご自分の定められた時に、このみことばを宣教によって明らかにされました。私は、この宣教を私たちの救い主なる神の命令によって、ゆだねられたのです。）テトスも同じく牧会書簡です。テトス2:10（盗みをせず、努めて真実を表すように勧めなさい。それは、彼らがあらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。）、テトス3:4（しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現れたとき。）、牧会書簡の中に不思議と”私たちの救い主なる神”という言葉が複数回使われています。他では滅多に見られない表現です。通常、”救い主”と言ったら、イエス・キリストを指すことがほとんどですけど、この牧会書簡では敢えて父なる神が”救い主なる神”と呼ばれてます。で、これは旧約聖書の中で、主ヤーウェが救い主と、いわゆる父なる神が救い主と、呼ばれていることに倣って、意図的にパウロが使っていると思われれます。父なる神を”救い主”と呼ぶような箇所は、詩篇106:21（彼らは自分たちの救い主である神を忘れた。エジプトで大いなることをなされた方を。）にも見られます。イザヤ45:21。（告げよ。証拠を出せ。共に相談せよ。だれが、これを昔から聞かせ、以前からこれを告げたのか。わたし、主ではなかったか。わたしのほかに神はいない。正義の神、救い主、わたしをおいてほかにはいない。）でもそれは、そのままそっくり子なる神イエス・キリストにも使われていますから、ここで強調しているのは、イエス・キリストも父なる神と同じ救い主である。父が救い主であって、子も救い主である。すなわち父と子は一つである。パウロとテモテも父と子の関係にあります。霊的な親子です。そこと重ね合わせてるわけなんです。子なる神イエス・キリストは、父なる神に対して忠実な者として父の御心を行うためだけにこの世に遣わされました。勝手なことはしなかったんです。すべて父の権威によってすべて父の示されること、父が望まれること、父の御心のみを行ったわけなんです。それと同じようにテモテもパウロを霊的な父とし、パウロの使徒的権威を継承した者としてパウロの語ったメッセージそのものをコピー

一して語り、パウロの行ったことをそのまま行い、そしてパウロの生き様をそのまま倣って神の栄光をあらわしたわけです。神の働きに<sup>あずか</sup>与ったわけです。父と子が一つであるように、パウロとテモテも一つであった。そのことを他の牧会書簡でテトスに対してもパウロは同じことをしているわけです。これは、牧会書簡の特徴であります。

で、次に『**私たちの望みなるキリスト・イエス**』と続きます。キリスト・イエスは、私たちの希望であると。“イエス・キリスト”という場合もありますし、“キリスト・イエス”という場合もあります。勿論同じ存在を指しているわけですが、しかし、“イエス・キリスト”という時には“イエス”を強調しています。“キリスト・イエス”という時には“キリスト”を強調しているわけです。“イエス”というのは個人名、“ナザレのイエス”、『ヤーウェは救い』という意味の名前です。でも“キリスト”は名前ではありません。“キリスト”は、肩書き、称号、タイトルです。ですから“キリスト”が先に来るとということは、そのタイトル、その職責、その役割を強調しているということです。個人名としてではなくて、タイトル、称号です。それは『油注がれた者』ヘブル語でいうところの“メシア”です。ですから、その“メシア”というのは、王であり、祭司であり、預言者としての働きです。それが世を救う“救い主”の姿であるわけです。ですからここでは“キリスト”が強調されているということは、その働きが強調されているということです。牧会者の働きは、キリスト的な働きをすることです。牧会書簡ですから、特にその働きに着目されているわけです。“油注がれた者”としての働き。それは、王として、祭司として、預言者として、キリストの如く働くということです。ですからパウロは意図的に“イエス・キリスト”ではなくて“キリスト・イエス”と言っているわけです。で、それが希望であると。これも注目に値します。テモテは恐らく失望していたと思います。もうがっかりしていたと思われます。それをうかがい知れるのは、**3 節**のところ「**私がマケドニヤに出発するとき(今日のギリシャ地方です)、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっています**」とあります。もう一度パウロはテモテに命令したことをここで振り返るように強調しているわけです。これを敢えて言ったのは、テモテは「もうエペソを去りたい。もう疲れた。もう嫌になってしまった。あまりにも重圧だ。プレッシャーだ。逃げたい。このエペソの教会ではいろいろな問題がある。とても私には荷が重すぎる。とてもあの偉大な師であり、父であり、大先輩であるパウロと同じようには働けない。」そう感じていたので、敢えてパウロはテモテに対して「失望してはならない。あなたの希望は救い主、“キリスト・イエス”である」と、言っているわけです。あなたも今日失望していないでしょうか。絶望していないでしょうか。あなたの希望は、“キリスト・イエス”であるということをもう一度覚えて頂きたいと思います。「このことに、あのことに、私はもう希望を持てなくなりました。」“キリスト・イエス”があなたの希望であります。キング牧師はこういう言葉を残しています。『**私たちは有限の失望を受け入れなければならない。しかし、無限の希望を決して失ってはならない。**』私たちの失望は所詮は有限なんです。限りがある失望と言って良いと思います。そんな失望は甘んじて受け止めなさい。しかし、無限の希望を決して失ってはならない。この無限の希望とは勿論私たちの救い主、“キリスト・イエス”であります。テモテはこのことを忘れてしまったと思われます。頭では分かっていたかもしれませんが、もう一度このことを思い起こさせる必要があったと、パウロは感じて、敢えて私たちの希望である“キリスト・イエス”と先ず語ったわけであります。これはテモテと同じ若い牧会者であるテトスに対してもパウロは同じことを語っています。希望のメッセージ。励ましのメッセージ。これは、箇所だけメモして下さい。テトス**1：2**、テトス**2：13**、テトス**3：7**。そこでいくつか私がポイントだけ読みますので、聴いて下さい。『**祝福された望み(祝福された希望)、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。**』とテトス**2：13**には書いてあります。祝福された望みは、私たちの救い主であるイエス・キリストで、特にここでは、イエス・キリストが戻って来られること、具体的には携挙のために戻って来られること、私たち花嫁を迎えに来られること

は、まさに祝福された望みであると。失望してる人は、この祝福された望みであるイエス・キリストがあなたのために戻って来られること、あなたを迎えに来られることをいつも覚えなくてはなりません。このキリストのことを覚えるならば、あなたは決して希望を失うことはなく、失望することはありません。絶対に絶望することはないんです。同じパウロの書簡で、ローマ 8 : 24~25 にも目を留めて頂きたいと思います。『**私たちは、この望みによって（この希望によって）救われているのです。**（勿論ここで言う救いとは、罪からの救い、永遠の滅びからの救いを指しているわけではありません。救われている者に対して言っているんです。クリスチャンに対してこの望みによって救われていると。私たちは神の恵みによって信仰を通して救われた者ですけれども、クリスチャンはこの希望によって救われ続けると。）**目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。**』これは何のことかということ、その前を見ていただくと、その望みというのはローマ 8 : 23 にありますように、『**私たちのからだの贖われること**』これを待ち望む。からだが朽ちないものへと栄化する。これは携挙の時に起こることです。一瞬のうちに、たちまちに、私たちの滅ぶべきからだ、罪の性質を持つこのからだ、すぐに病気になる怪我をして障害を持って疲れてしまうこのからだ、変えられるんです。死ぬことのないからだに。それが私たちの希望です。これが携挙の希望です。第 1 ヨハネ 3 : 3 もお読みします。『**キリストに対するこの望みをいただく者はみな（希望をいただく者はみな）、キリストが清くあられるように、自分を清くします。**』勿論ここで言われている希望も前節を見ていただくと、第 1 ヨハネ 3 : 2 『**愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら（携挙の時には顔と顔を合わせてキリストと会います。）、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの希望をいただく者は**』と続くわけです。ですから、今落ち込んでいる人、失望している人、絶望的な状態にあると思っている人は、是非この希望を見出して頂きたいと思います。この希望によってあなたは、救われます。失望している状態から脱出出来ます。イエス・キリストは必ず戻って来ます。あなたのために、この世界のために。そしてあなたはもう罪を犯すことのない者と変えられます。「どうして私はこんなにも弱いのだろうか。どうして私はこんなにも同じことばかり繰り返してしまう愚か者なのか。不甲斐ない。情けない。全く私は愚かで、馬鹿者であると。だれがこの惨めなからだから私を救い出してくれるのか。」イエス・キリストが必ず救い出してくれます。必ずこの弱さをあなたは克服できます。必ずあなたはキリストの似姿に変えられます。で、今現にあなたは栄光から栄光へと、キリストと同じ姿に変えられつつあるんです。で、最終的には携挙の時に、究極的にあなたはキリストと全く同じ姿に変えられます。これは希望です。ゆるがぬ希望です。その他の希望は潰えてしまうかもしれません。その他の希望は淡い希望であって、ただの願望で終わるかもしれません。ただの希望的観測で終わってしまうかもしれません。でもこの希望は確信に近いものです。聖書的な希望は、『**良いものが必ず来るという絶対的な確信**』と定義されます。良いものが必ず来るんです。イエス・キリストが必ず来るんです。その絶対的な確信が聖書的な希望です。その他の希望は信頼に足らないものだと思います。目に見えるものは信頼できません。移ろいゆくものです。目に見えるものは、失われてしまう、奪われてしまうかもしれません。でもこの希望は誰も奪うことはできません。あなたからこの希望を取り去るものは他にはありません。この希望によってあなたは、失望から救われるんです。この希望によってあなたは自分の弱さから救われるんです。愚かしさからも救われるんです。軟弱さからも、不甲斐なさからも。この希望がクリスチャンを救い続けるということを知って下さい。弱気なあなたを救うんです。

で、テキストに戻って頂いて、第 1 テモテ 1 : 1 の続きです。『**私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから、**』とあります。この”命令によ

る”という言葉も、このテモテへの手紙、牧会書簡全体でもそうなのですが、非常に重要なキーワードとなっております。通常はパウロの手紙の書き出しで自己紹介する際、パウロは多くの場合、“キリストのみこころによる使徒パウロ”と名乗るわけです。事実**第2テモテ1:1**を見て下さい。『神のみこころにより、キリスト・イエスにあるいのちの約束によって、キリスト・イエスの使徒となったパウロから、』と。また、さかのぼって頂いて**コロサイ1:1**『神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ』。そして、**エペソ1:1**『神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから』。さらには、**第1コリント1:1**『神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロ』と。そして、**第2コリント1:1**『神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ』。全部同じように”神のみこころによるキリスト・イエスの使徒”と、パウロは自己紹介しております。なのに、**第1テモテ1:1**では、“神のみこころ”というフレーズを使わないで、“神とキリストとの命令による”という言い方をしております。みこころによる、神の望みによる、神の願いによる、神の計画による。これも確かなんですけど、それだけでなくパウロは”神の命令によって”、“キリストの命令によって”、キリストの使徒とされたということも、同じく、等しく、真実であるということです。神様がそのように望まれたからだけではなくて、神様がそのように命じられたからということです。このことは大きいですね。王の王、主の主からの勅令を受けているということです。<sup>おごそ</sup> 厳かな勅令です。世界の、宇宙の、最高権威者から、命令されているのです。勅令を受けているのです。これが”召命”と呼ばれるものです。パウロは使徒として召されました。そして、テモテもパウロの後継者として、牧師として召されていったわけです。それは、神のみこころでもあり、同時に神の命令でもあります。命令ということは、好もうと好まざると、王の王、主の主の命令ですから、逆らえないのです。(逆らうべきではないんですけど。) これは絶対的な命令です。

私も同じく、神のみこころにより、神の命令によって、今の牧師という立場に置かれてます。この職務についてます。私が願ったからじゃないんです。牧師になりたかったからじゃないんです。神がそう望まれたから。でも、それ以上に神が私に命令されたからです。命令は拒めないということです。牧師の仕事が好きだったから、牧師になったんじゃないんです。やりたかったから、牧師になったんじゃないんです。仕方なく、牧師になったんです。でもこれは決して否定的な意味で言ってるんじゃないありません。私が”仕方なく”と言ったのは、牧師という仕事があまりにも重い責任の伴う重要な仕事であるということを知っていたからです。人の魂を取り扱う仕事。一步間違えれば永遠の運命を大きく変えてしまう。天国か、地獄か。生死を問われる以上です。医者<sup>いさしに</sup>の仕事も確かに重い仕事です。患者の生死を任せられるわけです。裁判官の仕事も、これも重い責務です。誤審なんてことがあったら、<sup>えんざい</sup> 冤罪で間違って死刑なんて判決を下してしまったら、一生後悔しても後悔しきれないものがあります。でも、それ以上に実は重いのが人の魂の扱いです。肉体は滅んでも、魂はそのまま残り、魂は天国に行くか、地獄に行くか、そのどちらかになるわけです。そのどちらかを決定付けてしまう。そのどちらかに影響を与えてしまうのが、この牧会という重い責務です。このことを私は知っていましたから、しかも聖書の中でヤコブが「**多くの者が教師になってはならない**」と。なぜならば「**教師は、格別きびしいさばきを受ける**」とまで警告されてますから、「あー、私は結構です」と。「そんなのは私にはとても向いてませんし、嫌です」と。「牧師だけは嫌です」と思っていました。でも神のみこころによって、神の命令によって私は牧師に召されました。

説教のプリンスと呼ばれるチャールズ・ハットン・スポルジョンは、同時に”牧師殺し”という異名を持ってました。彼は牧師を養成する学校も経営してました。”Pastor’s College” (パスターズ・カレッジ) と呼ばれるところで、世界最大のいわゆる神学校と呼ばれるものだったわけです。彼の牧会した教会も当時は、19世紀において世界最大の教会となっていたわけですが、彼は同時に牧師たちを養成する学校も運営していたわけです。で、そこで牧師とは何なのか、牧師の召命についても彼は厳しく語ったわけです。そのあたりの教えが『牧会入門』という本にまとめられていますので、これも牧会書簡を学ぶ上で皆さんにもお

薦めたい本であります。私もこのスポルジョンの『牧会入門』という本を通して牧師について学びましたし、牧師に対しての召命もそこからヒントを得ました。で、もう一人お薦めしたいのが、マーティン・ロイド・ジョーンズという人です。彼が書いた『説教と説教者』。その本も合わせてお薦めしたいと思います。で、その本の中でスポルジョンのことも触れてますので、少し引用したいと思います。『**牧師の召命について、私たちは問題をもう少し掘り下げなくてはなりません。すなわち“強迫感”がなければならないことです。**』牧師が召命を受ける時、そこには“強迫感”がなければならないと、すごい言葉が使われています。強迫されるようにして牧師になるわけです。これは最も決定的なテストになります。本当にその人が牧師に召されているかどうかの決定的なテストとは、“強迫感”だとロイド・ジョーンズは言っています。で、続きます。自分には他のことは何も出来ないと感じることが、ここで言われている“強迫感”です。牧師以外のことは何も出来ないという“強迫感”です。『**スポルジョンだったと思いますが、彼は若者たちによくこう言いました。「もし君たちが他の仕事が出来たら、それをしなさい。もし、教職者以外の、牧師以外の立場につくことが出来るなら、そうしなさい。」**』“だったと思いますが”とありますが、これは確かにスポルジョンが言ったことです。「牧師以外のことも出来ます。牧師以外にも私はサラリーマンも出来ますし、他の仕事も出来ます」と言うならば、牧師になるのをやめておけと言っているわけです。『**私もためらわずに全く同じことを言いたいのです。しかし、説教者に召されている人は他の何にも満足出来ないという意味で、他のことが出来ない人です。**』能力がないと言っているんじゃないです。「牧師以外のことはできません」とか、「他に私はやる事が無いので牧師になります」とか、そういう意味で言っているではありません。そうじゃなくて、牧師以外の仕事では満足出来ない。そういう人が本来、牧師に召されているんだということです。『**説教することへの召命が彼に臨み、そのような圧迫が彼に重くのしかかるので、「私は他のことは何も出来ない。私は説教するしかないのだ。」**と言うのです。その自覚が強迫観念となり、圧倒的なものとなり、ついに「自分には他のことは出来ない。これ以上抵抗できない。」と告白するのです。』この姿は、若いエレミヤの、預言者として召されたエレミヤの生涯の中にも見られます。エレミヤは神様から召されました。恐らく10代の後半から20代の前半にかけて、若い時に召されたんです。イスラエルにおいては大変厳しい時代に預言者として召されたわけです。でも預言すればするだけ自国民から、同胞から、迫害されたわけです。神の言葉を預かって、ストレートに真理を語れば語るだけ人々から拒否され、馬鹿にされ、そしてついにはエレミヤは同国民に殺されそうになるわけです。投獄されてしまうわけです。それでエレミヤは物凄くがっかりして、物凄く落ち込んで、「もう嫌だ。もう私は語るまい。もうこんな仕事嫌だ。語れば語るほど迫害される。こんなひどい目に遭う。やっつけられないよ。」というところまでいったわけです。完全に“burnout”燃え尽き症候群にかかっていたわけです。完全に鬱状態に陥っていたわけです。でも、そんなエレミヤの中に神が、燃えさかる炎を彼の内側に、そこでは骨の中に灯されて、そしてエレミヤは神の言葉を黙ってはいられない、黙してはいられない、語らずにははいられないというほど、激しい、言わば強迫観念に駆られて、そしてあらためて自分が神に召された預言者であるということを知覚して、再確認して、そして再び第一線に戻っていくわけです。それが真の神の召命というものです。これは絶対命令です。逆らえない、拒めない命令です。拒みたくなることもあるんです。「神のみこころによって、神の命令によって召されたはずなのに、どうして私はこんなひどい目に遭うんですか。どうしてこんな辛い目に遭うんですか。なぜ同じクリスチャンたちからこんなふうになんか言われなきゃいけないんですか。なぜこんなに迫害されるんですか。」投獄され、迫害され、時には殉教までも余儀なくされるわけです。皆さんに覚えて頂きたいと思います。神のみこころに従っても薔薇色ではないんです。神の命令に従っても、何もかもうまくいくわけじゃないんです。時には弾圧もされます。時には投獄もされます。時には殉教までも求められるということです。それでもこれは王の王、主の主であられるキリスト・イエスからの勅令です。だから私たちはそれに従うわけです。この中に、もしかしたら神の命令に従ったがた

めに、私はまさにエレミヤと同じように、またパウロと同じように、投獄されているような気分です。牢屋にぶちこまれたような気分です。理不尽な目に遭っています。不自由な状態、縛られてしまっています。神の命令に従ったがために、従ったがゆえに、こんな辛い目に遭っています。それでも私にもあなたにもチョイスがないということを知って下さい。これは命令です。結果がどうであれ、今の状況がどうであれ、ノーチョイスです。私たちは神の命令に従うばかりです。従う他ないんです。でもそのような者こそが、神にふさわしいしもべであるということです。それでもなお忠実でありつづけるということです。たとえそれが投獄を意味してもです。たとえそれが迫害を意味してもです。たとえそれが殉教を意味してもです。それでも私たちはこの神の命令に従いたいんです。従わざるを得ない。そのような燃えさかる思いが、閉じ込めておくことの出来ない熱い思いが、皆さんの中にあるのでしょうか。神の命令に従うと不利になる。神の命令に従うとこんな理不尽な目に遭う。神の命令に従うとこんな不利益がある。こんなひどいことが起こる。それでも従いたいんです。そういう思いがあなたの中にあるならば、あなたは神に大きく用いられる人です。でも、神は理解してくれます。あなたもテモテと同じように、ついビクついてしまうことがあります。つい投げ出したくなることがあると思います。「もう嫌だ。」エレミヤと同じですね。「もうやられないよ」と。「神のみこころに従ったのに。神の命令に従ったはずなのに。御言葉通りに行動しているのに。どうしてですか。なぜですか」と。そんなあなたにこの手紙もきっと励ましになると思います。

次に**2節**、『愛する子テモテへ。父なる神および私たちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安がありますように。』**1節**と**2節**で、“父なる神”と、そして“キリスト・イエス”。再び繰り返されています。強調されています。私たちは、神様と繋がっているということ。神様と関係を持っているということ。私たちは神に仕えているということ。神との間に私たちには主従関係があるということ。このことをいつも覚えたいと思います。で、パウロからするとテモテはまさに我が子であります。直接信仰に導いた、キリストに導いた真実の子であったわけです。テトス**1:4**にも『同じ信仰による真実のわが子テトスへ』と。テトスもまたテモテ同様パウロを通して救われ、そしてパウロの同労者となった、パウロの片腕となった人物です。興味深いことに、そのテモテに対しても、またテトスに対しても、パウロは同じ挨拶をしています。それは、『恵みとあわれみと平安がありますように』。通常は、パウロの手紙を見ると『恵みと平安がありますように。』これが普通なんですけれども、そこに“あわれみ”が入っています。これは、ちょっと特殊です。“恵み”と“あわれみ”の違いは、“あわれみ”というのは、当然受けるべきものを受けないこと。消極的なニュアンスです。一方で“恵み”は、当然受けるべきでないものを受けること。積極的です。あわれみは、当然受けるべきものを受けない。つまり、罪人が当然受けるべきものは、永遠の滅び、裁き、刑罰。その一方で恵みは、当然受けるべきでないものを受けること。それは罪人にとっては、永遠のいのち、救いです。神の子とされること、キリストの花嫁とされること。そして神のしもべとして召されて、神の栄光ある働きに与かるということ。これは全部恵みです。裁きを受けないこと。消極的な意味ですけれども、あわれみはあります。必要です。恵みはさらに一歩進んで、当然受けるべきでないものを受ける。分不相応な者に対する過分な親切であります。この恵みとあわれみの違いは皆さんよくご存知だと思いますし、度々この定義は皆さんにお伝えしているのもうすっかり把握されていると思います。通常、恵みと平安という挨拶。これは、恵みは“カリス (ハリス)”というギリシャ語です。これは、もともとギリシャ語の“ハラ”『喜び』という言葉から来ています。ギリシャ人も挨拶の時この“ハラ”が使われたわけです。一方で平安は、ユダヤ人の挨拶“シャローム”が使われまたわけです。ですからギリシャ人とユダヤ人に対してパウロは毎回の手紙の中で挨拶をしてるわけです。教会とは、イエス・キリストを信じる元ユダヤ人と元異邦人の信仰の共同体であります。ですから、それぞれにパウロは挨拶を送っているわけです。あなたがたは今はキリストにあって一つであると。それに加えて『あわれみ』というのが特殊に加えられているのは何故なのか。テモテだけじゃなくて、テトスにも同じように言われるわけですが、

その理由は、あなたに息子があれば分かると思います。自分に息子がいたら分かると思います。あわれみは必要だと思います。この息子には神のあわれみが絶対必要であると。やんちゃな、腕白な息子がいれば、本当にこの子にはあわれみが必要だと、親なら良く分かると思います。または、おてんば娘というような、なかなか言うことを聞かない、そういう娘がいても分かると思います。あわれみが必要だと。テモテもテトスも若い奉仕者として、牧会者として、とにかく神のあわれみが必要だったんです。なぜならば、失敗をよくするからです。間違いをよく犯すからです。その都度、その都度、あわれみが必要となります。勿論パウロも他人事ひとごととは思っていません。第1テモテ1:13,16のところで、パウロも自分もあわれみが必要だということ、あわれみを受けて今の自分があるということを語っております。

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないうちで受けたので、あわれみを受けたのです。(第1テモテ1:13)

しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。(第1テモテ1:16)

このあわれみは、若い牧会者テモテ・テトスにも必要ですし、又パウロにも必要だったわけです。私にも必要です。あなたにも必要です。実は、今日は私と家内の結婚記念日です。神のあわれみがなければ、私たち夫婦はやって来れなかったと正直に告白したいと思います。1997年6月7日に結婚式を挙げました。カルバリーチャペルのコスタ・メサでチャック・スミス牧師が私のために司式をして下さいました。今でもその日のことは、昨日のことにように覚えていますけれども、16年経ちました。あつという間の歳月でしたけれども、長野新幹線が開業した年でもあります。その頃に私たちは結婚しました。マザーテレサが天に召されたのも同じ年です。神のあわれみがなければとてもやって来れませんでした。それは結婚生活だけでなく、牧会生活も然りであります。何度も何度も失敗しました。何度も何度も投げ出したくなる時もありました。神のあわれみがなければ、とても立ち行かなかった。とても続けてやって来れなかった。正直に認めたいと思います。でもそのように正直に神のあわれみを必要とする者こそが、神に用いられるということも知って頂きたいと思います。「私は神のあわれみなど必要ない。あわれんでもらうような者じゃない。私は出来る人間。そんなあわれみなんかいらぬ。」プライドがあなたにそう言わせるかもしれません。でも私たちはそんなつまらないプライドを持ってはなりません。だれもが神のあわれみを必要とする者です。テモテ、テトスでさえあわれみを必要としたんです。ならば私もあなたもどれだけあわれみを必要とすべき者なのか、もう一度そのことを考えなくてはなりません。同時に私たちの大牧者であるイエス・キリストもあわれみ深い大祭司と呼ばれています。羊飼いのいない羊たちを見て、かわいそうにとあわれみの思いを起さされるそのような羊飼いなんです。牧会者にとってこのあわれみは必要不可欠です。羊のことをあわれむ牧師。牧会のミニストリーにはこのあわれみは欠かせません。

で、3節『私がマケドニヤに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっとどまっただけで、ある人たちが違った教えを説いたり、』この“違った教えを説く”というのが、一つテモテを悩ましていた理由であります。いわゆる偽教師たちがエペソの教会に入り込んでいて、パウロとは違った教え、新しい新奇の教えを説いてまわっていたわけです。それはテモテを悩ましたわけです。第1テモテ6:3にもそのことが触れています。『違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、』と。このようにパウロの教えとは違った新奇の教え。聖書を使いながらも聖書を曲解した非聖書的な教えを偽教師たちが説いて、テモテの働きを妨害していたわけです。テモテを深く悩ましていたわけです。でも、このことについてはあらかじめパウロは警告

しておりました。使徒 20 : 28~30 です。これはパウロが 3 年間エペソで働いて、そして長老たちにお別れのメッセージを語る場面であります。『あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私が出発したあと、狂暴な狼が（これが偽教師たちであります。）あなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも（エペソ教会の中からも）、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。』偽教師たちは、曲がったことを語る。聖書を曲解してということは、聖書を使うんです。御言葉を利用する、乱用するんです。ですから、まことしやかに教えるわけです。でも彼らのやることは、自分の方に引き込むということです。キリストの方に導くのではなくて、自分の方へ引き込もうとする、抱き込もうとする、自分の支持者とし、自分のまさに奴隷として顎でこき使うような、そういう偽教師たち。カリスマ性のあるカルトの教祖のような、そういうフィギュアとなっていくわけです。

で、テモテの方に戻って頂きたいのですが、その違った教えに関して具体的に第 1 テモテ 1 : 4『果てしない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。』果てしない空想話、つくり話、それと系図です。これらは聖書を使って語られたということです。聖書の御言葉も利用しながら、それを彼らの教えの権威として、権威付けに利用しながら、聖書に書かれていないことを勝手に想像して作り話として教えるわけです。又は、系図というものを膨らませて、勝手に聖書の登場人物を自分の好きなようにでっち上げて、教えるわけです。ユダは本当は英雄だったんだと。そしてイエス・キリストの十字架の死に協力したんだと。イエスはマグダラのマリアと結ばれていて、実は結婚していたんだとか。そういう果てしない空想話をするユダの福音書。現代のユダの福音書はダヴィンチコードといったものですが、もう 2000 年前から、1 世紀の時代からいくらかでも存在していたということです。

これは全ての牧師、全ての聖書を教える者たちにおいては、誘惑となることでもあります。というのは、牧師という人たちは、聖書教師という人たちは、つついオリジナルのものを教えたい。他の人がまだこれまで教えたことのないようなことを教えたい。他の人たちがまだ気付いてもない新しい着眼点で、新しい洞察によって、新しい教えをして、人々を魅了する、感服をさせる、関心をさせる。そして自分の教える能力がいかに優れているのかをアピールする。そういう誘惑が常に牧師たち、聖書を教える人たちにあります。でもそのような誘惑に陥ってはならないということです。聖書に書かれていることだけを、単純明快に、シンプルに教えていくだけです。前にも教えたと思いますけど、もしそれが新しいならば、それは真実ではありません。もしそれが真実ならば、それは新しくはないということです。それは英語からとられている言葉です。よく私が聴いた重要な教訓です。”If it is new, it is not true. If it is true, it is not new.”もしそれが新しい新奇の教えならば、今まで誰も教えたことがないような教えならば、「2000 年の教会の歴史の中でまだこれまで誰も教えたことがない新奇の教えです。これは誰も気付いたことのない新しい教えです」なんてことを皆さんが耳にしたら、それは間違いなく真理ではない、真実ではない、非聖書的なでっち上げだと、偽りの教理だというふうに考えて下さい。もしそれが真理ならば、真実ならば、昔から教えられて来たことだと。良い意味で、伝統的な教えということです。勿論伝統的な教えがすべて正しいわけではありません。聖書によって吟味しなければならないものもいっぱいあります。でも新奇な教え、これには飛びつかないで下さい。飛びつきやすくなるかもしれません。行き詰まってくれば来るほど、この誘惑は強くなります。これが今のはやり、流行である。”聖霊の第 3 の波”、”力の伝道”、”トロント・ブlessing(Toronto Blessing)”なんてかつてありました。でもそれらは全部流行っては廃れていったわけです。”繁栄の福音”、”信仰の言葉”というもの。これらの用語を皆さんも知っていると思います。聞いたことがあると思います。

又は、系図を調べて、「日本は、失われたイスラエルの部族、流れ着いてきたユダヤ人を先祖とする民族である。」日ユ同祖論。「ルーツを辿れば、神道も仏教も皆、イスラエルの影響を受けているから、神道も仏教徒も皆一つとなって協力しあって、そして名前こそ違っても、同じ神を信じる者として仲良くやっていけるんじゃないか。」気を付けて下さい。そんなことは聖書に書かれてはおりません。

また、「流行っている心理学も取り入れてみようじゃないか。」自分を愛する心理学。隣人を愛するためには、先ず自分を愛さなければ。そこから始めなければどうして隣人を愛することが出来るだろうか。」まことしやかな教えが入り込んで来ております。

「クリスチャンにならずに死んでしまった人は、もう地獄に落ちるんですか。そんなことは認められないし、だから人は中々クリスチャンにならない。であるならば、セカンドチャンス論はいかがなものか。イエス・キリストを信じないで死んだ者もハデスに行ってからもう一度救われるチャンスが与えられる。セカンドチャンスが与えられる。死んでからも救われる。そうしたら人々はもっと救われてくれるんじゃないか。クリスチャンになってくれるんじゃないか。」

行き詰まってくると、段々こういう新奇の教えが入ってくるわけです。勿論新奇といっても、昔からあるものです。その時代においては新奇に聞こえるだけです。2000年前から違った教えは説かれているんです。『日の下には新しいものは一つもない。』伝道者 1:9 は言っております。

ですから騙されてはいけません。第1テモテ 4:1『しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると（世の終わりにになると）、ある人たちは感わず霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。』で、続きもあります。世の終わりにになると違ったことが教えられるようになります。特にそれが加速化してきます。で、第1テモテ 6:20にも『テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「霊知」と呼ばれる反対論を避けなさい。』“霊知”というのは、ギリシャ語で“グノーシス”と言います。グノーシス主義という当時の異端です。“グノーシス”というのは、もともと“知識”という言葉です。直訳は“知識”です。「新しい知識があります。これは新たに聖霊が私に示された新しい啓示の知識です。この知識をもって聖書を新たにあらためて紐解くのです。」そのようにしてこれまでもキリスト教系の異端は新奇の教えを生み出して来たわけです。エホバの証人、モルモン教、統一教会、然りであります。

モルモン教は特に系図を使います。ソルトレイクシティには、世界最大の家系図のモルモン教の施設があります。モルモン教の教えによれば、「死んだ者も救われる。家系を追って、その家系でモルモン教徒でなかった者のために、代わりに死者のためのバプテスマを受けて、その人もモルモン教徒になって救われていくんだ」と。とんでもない教えを説くわけです。

統一教会の原理講論も然りであります。勝手に果てしない空想話をして、自分の前にイエス・キリストが、ヘブル語なまりの韓国語で、若しくは韓国なまりのヘブル語か分かりませんが、勝手なことを言って、空想話を仕立て上げて、原理講論を書いたわけであります。

摂理というグループも私たちと同じように“バイブルスタディー”と称する聖書の学びをするんです。同じく“バイブルスタディー”と彼らも呼ぶんです。騙されてはいけません。それは果てしない空想話です。作り話です。系図を膨らませているような話であります。聖書にそんなこと一つも書いてないのに、あたかも聖書に書かれているかのように膨らませて、空想した教えがまことしやかに教会の中にも説かれているわけです。もしそれが新しいならば、それは正しいものではありません。真実ではありません。もしそれが正しいならば、真理ならば、それは決して新しい教えではあってはならないのです。真理は普遍的なものです。昔からなければいけないものです。新たに発見されるようなものは真理ではないのです。で、真理はいつの時代にも、どの世代にも、どの文化にも通用するもの。普遍的なものです。そして、別の漢字で不変、それは変わらないものです。広く普く伝えられている真理、普遍です。又、決して変わること

のない、書き換えられることのない、不変の真理。両方共真理です。テモテはそのような違った教えによって随分苦勞していたと思われます。それでも牧会を続けられなくなってしまふような、やめてしまいたくなるような、燃え尽きてしまつてもうここを離れたくなるような思いに駆られていたと思われます。

他にもそのような新奇の教えを説く者たちがいて、テモテの牧会者としての權威を<sup>おとし</sup>貶めるような、そんなことも事実としてあったと思います。それが**第1テモテ4:12**に書かれているように、テモテは若かったので軽く見られていたわけですから。違った教えをする人たちは、おそらくはテモテよりも年齢が上だったと思われます。信仰歴もあって、熟練した者と思われていたと考えられます。その一方でテモテの信仰歴も浅く、また年齢的にも若い。だから彼は軽く見られていた、軽んじられていた。やりづらいわけです。若い牧師は、年配者に氣を使って、非常にやりにくいところがあります。特にこの日本の社会もそうです。ユダヤの社会もそうです。年功序列というのがあるわけですから。当然年配者はリスペクト（尊敬）されて然るべきですけども、でもこの神のしもべ、神の人、牧会者もリスペクトされるべきなんです。年齢とか関係なしにです。

**第2テモテ2:6~8**も読みたいと思います。テモテの抱えていた悩みです。『**勞苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。私が言っていることをよく考えなさい。主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます。私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。**』そこで実際にテモテは苦勞しても苦勞しても中々それに見合う報酬というか、報いを得られていなかったということも背景としてあったと思います。認めてもらえない。軽く見られて馬鹿にされる。そういうこともテモテを悩ませていた、苦しめていた事柄であったと思われます。エペソという地域も土地柄が非常に特殊なところで、そこはアルテミス神殿という世界の七不思議の中に数えられるような、ギリシャの豊穰の女神、セックスの女神が讃えられ、世界中から参拝客が訪れるような偶像礼拝の町でもありました。神殿娼婦たちがおりまして、参拝客は性的不道徳を行っていたわけですから。いわゆる日本で言うところの、必ず神社仏閣のところにある岡場所、門前町にあるそのような遊女だとか、また風俗業が伴うようなことが昔も今も行われていて、そういうところで牧会するのは確かに苦勞もあったと思います。加えて、パウロが3年間もとどまって、最大の働きをしたところですから、そういう意味でもプレッシャーがあったと思います。で、それに加えてその偽教師たちが違った教えを教えている。教会の中をかき乱す。苦勞が絶えなかったわけですから。

**第1コリント16:8~9**も見て頂きたいと思います。テモテの抱えた苦勞、悩み、プレッシャーですね。『**しかし、五旬節までは（ペンテコステまでは）エペソに滞在するつもりです。というのは、働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。**』エペソには、反対者も大勢いたということですから。そんな彼らとテモテは対決しなければいけなかったわけですから。大勢の反対者と対決しなければいけなかったんです。プレッシャーもあり、パウロから厚い信任を受けて期待をかけられていた、そういうプレッシャーもあったと思います。重い重責を<sup>にな</sup>担っていた、そういうプレッシャーもあったわけですから。反対者と常に対峙しなければいけない、対決しなければいけない。若者には少々荷が重いようにも感じますけれども、でもそこは自分の力量でカバーするのではないわけですから。“年が若くても”、それは言い訳にはなりません。“経験が浅くても”、それは言い訳にはなりません。ある人たちは、「牧師はある程度社会経験を積んでからでないと、牧師になるべきではない」と言ったりもします。それは確かに一理あるかもしれませんが、しかしこれは神の仕事なんです。人の仕事じゃないんです。人間の作った組織であるならば、勿論未経験の者よりも、経験豊かな者の方が適任者だと思われたいと思います。でも神の働きにはそのようなものは何一つ問われないということですから。むしろ問われるとするならば、この牧会書簡に明確に記されている資質、資格というものが問われて、それはキャラクターです。人格のことです。それは人生経験とかは関係ありません。そのことは、3章において詳しく見たいと思いますので、今は深入りしませんけれ

ども、とにかく先ず第一に牧会者として必要なことは、その違った教えに対して、違ってない正しい教え、正当な教理、健全な教えを説かなければいけない。新奇な教えじゃなくて、昔からの教え。聖書に書かれていることのみ。聖書の枠内だけで教えるということです。それはすなわちパウロの教えたことであつたわけです。パウロと違ったことを教えるてはならない。むしろパウロの教えたことをそのままそっくり忠実に教えるようにと、改めてパウロはその弱気になっているテモテに語っています。新奇の教えに多くのエペソの教会員たちは、なびいたかもしれません。その結果、いつも同じことばかり言っている、古めかしいことばかり言っている、パウロと同じことしか言わない、パウロのコピーだと言われるようなテモテは、不人気だつたと思われまふ。どんどん人々は、テモテよりも、もっと熟練した、もっと経験豊かな、もっと有名な、もっと耳新しいことを説いている、そういう偽教師たちにどんどん取り込まれて、テモテは行き詰まっていたかもしれません。それでもなおパウロは、「あなたは聖書から離れてはならない。どんな新しい教えが流行しようとも、あなたはこの聖書の真理に堅く立って、この真理のみを忠実に教えずなくてはならない。私があなたに教えたこと、それをあなたは教えるべきだ。」と。

**第2テモテ 2:2** もお読みします。『**多くの証人の前で私から聞いたことを**（パウロから聞いたことを）、**他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。**』パウロの教えをそのままそっくりコピーして、何もそこに付け加えないで教えずなさいと。パウロが教えずもない違ったことを教えずてはならないと言っているわけです。勿論パウロの教えたことが、今は文字化されて、文書化されて、パウロの書簡として私たちに与えられています。ここから離れて教えずてはいけない。ここに書かれていないようなことを教えずてはならないと。真理はそのまま語り継がれていくべきだということです。

私もこの教会から牧師が新たに生まれることを望んでいます。御言葉を教える教師たちが起こされていくことを望んでいます。そういった人たちにも、聖書だけを教えるように。少なくともこの MGF で私が教えていることをただそのままコピーして教えずただで、それで十分なんです。私が言つてもないようなことを言う必要はないです。もちろん聖書の中で私が触れてないことは、いくらでも触れて欲しいと思ひますし、私が発見出来なかつたことをいくらでも伝えて頂きたいと思ひますけれども、でも最低でも私が教えていることだけを、ただそのままそっくりコピーして教えずただで、それでいいんです。違ったことを教えずる必要はないんです。これはむしろ重荷を軽減することだと思ひます。テモテは迷つたんです。他の人たちが新しい新奇の教えになびいていく。私も何かオリジナルの教えを、パウロが教えずても無いことを新たに編み出して、新たに作り出して教えずた方がいいんじゃないか。誘惑に駆られたわけです。でもパウロは、そんなテモテをたしなめるようにして、戒めるようにして、「あなたはそのままがいいんだ」と。「古臭い、カビ臭い教えだと言われても、それでもいいんだ」と。「私のコピーだと言われても、それでもいいんだ」と。「何と言われようと、あなたは私が教えずたことだけを教えずればいいんだ」と。「ここに書かれていますことだけを、聖書から離れないで、忠実に、シンプルに語ればいい」と。ですから、これから聖書を教えずる働きに召されていく人たち。男性も女性も聖書を教えずる働きに召されていきます。自分の子供にも教えずます。孫にも教えずます。若いクリスチャンにも教えずます。年老いた婦人は若い婦人たちに教えずるようにと、**テトス 2:3**に書かれております。また男性も霊的リーダーとして、家庭でも教えずる召しもありますし、また教会の中でも男性はリーダーシップをとつて若いクリスチャンたちに教えずていく働きに必ず召されていきます。私のように話せない。私のように語れない。だから私は召されていないなんて思わないうで欲しいと思ひます。そのままそっくり真似ればいいんです。コピーすればいいんです。もちろん私だけをコピーしなくてもいいです。これまでも沢山の人が、沢山の素晴らしい聖書的な健全な教えを説いてきたわけです。それをそっくりそのままコピーして構わないんです。それが聖書的であるならばです。ですから、何か自分が新しい教えをしなければいけないなんて思つたら、それはプレッシャーになるかもしれません。中々そうなると思えずられないかもしれません。でも真似ればいいんです。何度も聴いて、何

度も聴いて、何度も学んで、何度も学んで、それを教えればいいんです。悩まなくてもいいんです。

で、**4節**にもう一度目を戻して頂いて、『**果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。**』と。“命じてください”という言葉、これは、英語の聖書では**3節**に組み込まれています。原文でも**3節**に組み込まれている言葉ですけれども、“命じる”という言葉がキーワードであるということは先にも触れました。この言葉は、実は軍隊用語です。“上官から命令されたことをそのまま伝える”という言葉です。ですから、パウロからテモテに。軍隊用語として、上官から下士官に命令されているわけです。それをそのまま、命令を言い換えてはいけないうけです。命令そのままを伝えなければいけない。勝手に肉付けしたり、勝手に解釈して違ったような言葉を使っはてはいけないうけです。同じ言葉で、伝言ゲームのように伝えなければいけないんです。それが忠実な働き人です。新奇な教えをそこに付け加えたら、それは上官の命令に背くことになります。軍隊においては、それは絶対に違えてはいけないうけの、変えてはいけないうけメッセージです。パウロからテモテ、テモテからエペソの教会員たちへ、語り継がれていかなければいけない、変えてはいけないうけ、付け加えてはいけないうけメッセージです。この“命じる”という言葉がキーワードであるというのは、この**4節**だけじゃなくて、他にも**5節**『この命令』という名詞形で使われています。動詞だけじゃなくて、名詞も使われています。**18節**、そこにも『命令』という言葉が使われています。そして**4章11節**、**5章7節**、**6章13節**、**6章17節**。この**第1テモテ**だけで、この『命じて下さい。』若しくは『命令』という動詞形、名詞形、合わせて7回も使われています。テモテは牧師ではありませんけれども、同時にキリストの兵士でもあるということです。**第2テモテ2:3**に『キリスト・イエスのりっぱな兵士』という言葉が使われています。牧師でもあるんですけれども、兵士でもある。上官からの命令は絶対です。その命令は、忠実にそっくりそのまま伝えなければいけません。違えてはいけないうけです。これが牧会者としても重要な働きであるということです。牧師は、聖書に忠実な健全な教えを説かなければいけない。それが牧師の主たる働きです。

で、**4節**。続きとして『**そのようなものは、論議を引き起こすだけで**（そのようなものというのは、果てしのない空想話と系図です。議論を引き起こすだけ。それが違った教えの特徴です。いろんな教えがあります。でも、もしその教えが、”ただ議論を引き起こすだけのもの”であるならば、それは退けて下さい。一方で健全な教えは）、**信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすもの**』であると。ですから、いろんな新奇な教えが入ってきて、そこでいろんな議論、ディベート、ディスカッションが行われていく中で、ただ議論だけを引き起こすだけ、であるならば、そのようなものにもう耳を貸す必要はありません。それは不毛な議論しか引き起こしません。結局、何の目的もないわけです。何の結論もないわけです。目的はただ議論を引き起こすだけです。その一方で健全な教えは、ちゃんと確たる目的・目標があります。それは先ず第一に**4節**にある『**信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすもの**』。そうでなければ、もう相手にしなくていいんです。もうそれ以上議論しなくていいです。教会の中でもいろんな新奇の教えで議論することがあると思います。いろんなクリスチャンとも議論することがあると思います。でもただ議論を引き起こすだけのものならば、もう時間の無駄ですから、労力の無駄ですから、相手にしなくて結構です。玄関先でピンポンしてくる人たちと、”果てしのない空想話、系図”それがただ単に議論を引き起こすだけならば、三位一体の神についてとか、「キリストは神ではない。エホバだけが神である。永遠の滅びなんかない。地獄なんかないんだ。」とか、いろんなことで議論することがあるかもしれません。でもそれに対して、『**信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすもの**』でないならば、もうそれ以上時間を使わなくて結構です。

で、**5節**。『**この命令は、（キーワードですね。）きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。**』愛を目標とするものです。愛がなければ、何の値打ちもありません。愛がなければ、何の役にもたちません。どんなにそれが高尚な議論だったとしてもです。もちろん愛というのは、

ここで言われているように“きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛”です。人間的な愛とは勿論次元が違います。きよい心とか説明は必要ないと思いますね、混じりけのないピュアな心。正しい良心。良心も正しくないときもあります。良い心と書いてありますけれども、必ずしも良い心でないときがあるわけです。この良心によって私たちは善悪を判断したりも出来るわけです。違和感を感じるときもあります。この良心が葛藤するときもあるわけです。良心に偽って、良心に反して、良心に対して罪を犯すということもあります。本当はそれが正しいことだと分かっているのに、そうしない。そういうときがありますけれども、そういう時は、あなたは愛から行動しているのではないということです。いろいろと教えられるところがあります。”良心”という言葉も 5 節だけじゃなくて、19 節、そして 3 章 9 節、4 章 2 節に使われています。特に 4 章 2 節には、”良心が麻痺する”ということが書いてあります。『それは、うそつきどもの偽善によるものです。(違ったことを教える人たちの教えです。偽善によるもの。) 彼らは良心が麻痺しており、』と。良心も麻痺してくるんです。ヘブル人への手紙にも”良心”という言葉が多用されていて、”良心が汚される”なんてこともよく言われています。テトスの手紙 1:15 にも、良心は汚れるものだ。罪によって良心が汚れてしまう。そのまま放っておくと、そのまま罪を繰り返して悔い改めない状態が続くと、良心はついには麻痺すると書いてあるわけです。テトス 1:15 では、良心が汚れる。第 1 テモテ 4:2 では、良心が麻痺してくる。頑かたくなになって罪を繰り返していくと、いつしかその良心は麻痺してしまう。気を付けたいと思います。でも私たちは、“きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛”を目標とする者です。

オズワルド・チェンバーズはこう言っています。『主は私に規則を与えてはおられない。しかしご自分の基準は明らかになさっている。もし私と主との関係が愛に基づいているなら、私はためらうことなく主のおっしゃることをする。もしためらうのなら、私が主と競合する別の誰かを愛してるからだ。ハッキリ言うならそれは自分自身だ』と。もしあなたが聖書に書かれている命令に対して、ちょっと躊躇してしまう。「これはちょっと聞き従うのは、どうかと思う」と、ためらってしまう。躊躇することを感じているならば、あなたは主よりも他のものを愛していると、オズワルド・チェンバーズは指摘してるわけです。で、それは他ならぬ自分自身だと。自分を愛しているから、主の命令に従いきれないんです。従いたくないんです。従うのにためらうんです。何故あなたは従うのをためらうのか。ハッキリ言えば、あなたは自分を主としているからです。また、同じくオズワルド・チェンバーズはこうも言っています。『信仰は、どこへ導かれているかは知ることが出来ませんが、導く方がどなたであるかが分かり、またその方を愛するようにします。』それが偽りのない信仰ですね。それがきよい心、正しい良心です。『信仰は、どこへ導かれているかは知ることが出来ませんが、導く方がどなたであるかが分かり、またその方を愛するようにします。』私たちはこの愛を目標としています。

ロイド・ジョーンズもこう言っています。『私は全身全霊をもって神を愛しているだろうか。もしそうでないなら、あなたは罪人である。』私たちは罪人です。もしあなたが全身全霊をもって神を愛していないならば、自分を愛しているならば、あなたは主の命令に従いません。主の命令に従わずに平気でいられるならば、あなたは主のものではないと思われれます。何の良心の呵責もない、痛むこともないならば、平気でそれを続けられるならば、あなたは多分救われていないと思います。そのようにして吟味して頂きたいと思います。

次に 6 節に『ある人たちはこの目当てを見失い、わき道にそれて無益な議論に走り、』7 節『律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していません。』これが、違ったことを教える、新奇なことを教える、聖書から外れたことを教える、偽教師たちの姿です。律法の教師でありたいと望むんです。牧師になりたいと望むんです。でも、自分の教えていること、言っていることを全く理解していない。皮肉なことですね。先程も冒頭で触れたように、私は牧師に

だけはなりたくなかったんです。なぜならヤコブ 3:1 に『多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。』と。それだけ重い責任が問われるわけです。自分が教えていることをしっかりと把握し、深く理解して、それを教えるものでなければいけません。もし間違ったことを教えたら、大変なことになります。患者の命を預かるよりも、囚人の命を預かるよりも、もっと重い責任が問われるということです。その一方で第 1 テモテ 3:1 では『人がもし監督の職につきたいと思うなら（これは、言い換えるならば、牧師、教会の指導者の職につきたいと思うなら）、それはすばらしい仕事を求めることである』ということばは真実です。』あまり“牧師が特別厳しいさばきを受けるので、そんな仕事には就くべきではない”と強調し過ぎると、誰も牧師にならないと思います。でもその一方で、もしその人が神に召されてるならば、それは素晴らしい仕事に召されているのであって、しかもその仕事は神からの命令でもありますから、それは健全な意味での“強迫感”に駆られていくものです。もうそれ以外の仕事が出来ない。それ以外の仕事では満足出来ないようになります。でもこのような“健全な強迫感”は、偽教師たちの中にはありません。彼らは自分で律法の教師になりたいと望むんです。で、加えて自分で教えていることも全然分かっていない。それが偽教師たちの皮肉な姿です。

で、8 節で、その律法を教えながら、その律法について何も分かっていない、そういう人たちに対して、パウロは律法とは何なのか。律法の本質、律法を正しく用いるその方法も説いております。『しかし私たちは知っています。律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです。』律法は正しく用いるならば良いものだ。偽教師たちは、「信じるだけでは不十分。神の恵みだけでは不十分。これもしなければいけない。この教えも、この新奇の教え、この新しい霊的知識、これがなければ聖書を正しく理解出来ない」とか、そういうことを言うわけです。それは聖書プラスアルファ、信仰プラスアルファ、イエス・キリスト・プラスアルファ。ですから、いわゆる律法主義、行為義認に結びつく教えであります。でも律法は、こんどはそのような律法主義だけを促すようなものではなくて、律法は本来は正しく用いるならば、良いものとして活用されると。正しく用いなければ、誤用されれば、律法は良くないものになってしまうわけです。

で、9~11 節を見て頂きたいと思います。律法を正しく用いるという具体例です。『すなわち、律法は、正しい人のためにあるのではなく、律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らわしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、不品行な者、男色をする者（これは同性愛者、ゲイです。）、人を誘拐する者、うそをつく者、偽証をする者などのため、またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです。祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのであって、私はその福音をゆだねられたのです。』今読んだ 9,10 節のところには、14 種類の人たちのことが書いてあります。若しくは 14 項目の罪が列記されています。日本語では合体しているものもあります。例えば、“律法を無視する不従順な者”というところは、本来は“律法を無視する者”と“不従順な者”。で、次に続く“不敬虔な者”と“ただの罪人”。そういったふうに本来分けられて、14 種類若しくは 14 項目出て来ます。律法はそんな彼らにとって実は良いものとなると。もっと突き詰めて言うならば、良い働きをすると言ったほうが良いかもしれません。

ガラテヤ 3:24 でこう言われています。律法は良いもので、良い働きをする。それは罪人に対してということです。『こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。』律法はこのような 14 種類の罪人たちにとっては、良いもので良い働きをする。律法は、私たちに罪を気付かせ、そして罪からの救い主であるキリストへ導くものである。罪の自覚が生じるところに、罪からの救い主への必要性が自動的に起こるということです。「このままでは私は救われない。このままでは私は天国に行けない。地獄に堕ちてしまう。だから私には救いが必要だ。」と。必ず福音を語る時には、合わせて律法も語らなくてははいけません。これは律法主義を説くとは全然違う話であります。つつい私たちは律法主義という言葉から、律法というものを何かマイナスのイメージ

で捉えている節があると思います。「律法じゃなくて、恵みだ」と。でも律法も罪人にとっては良い働きをするんです。クリスチャンには、律法は必要ありません。正しい人には必要ないと書いてあります。正しい人というのは、勿論完璧な人という意味ではなくて、神の目に正しい人。イエスを信じているがゆえに、信仰によって義と認められた人が正しい人です。彼らにはもう律法は必要ありません。なぜなら、彼らは心に律法が書きつけられているので、もう<sup>おの</sup>自ずから神が言われることが正しいと信じていますから、神の望まれることを行いたいと思うわけですから、敢えて律法・戒律・ルールを押し付けられる必要はないわけです。その一方で、キリストを知らない者は、この律法が重要な働きをして、彼らをキリストへ、救い主へ導くと言っているわけです。これもスポルジョンの言葉です。『老説教者ロビー・フロックハートはこう言うのが常であった。もし我々が律法という鋭い針をもってあらかじめ道を開けておかないならば、福音の絹糸によって縫うことを試みても無駄である。律法が針のように最初に来て、それからその後で福音の糸を引くのである。それ故に、罪、義、そして来るべき裁きについて説教をするがよい。詩篇 51 篇のような言葉は繰り返して解説されるべきである。神が人間の最も欲深い部分の内容における真実を要求しておられること。そして犠牲の血を注ぐことによる清めが絶対に必要であることを示しなさい。心を狙うべきである。傷を調べ、魂の最も急所であるところに触れるが良い。(鋭い、痛い、突っ込まれる、グサツとくる、そういうメッセージをしなさいと言っているわけです。) より厳しい主題を語ることを遠慮してはならない。なぜならば人々は癒される前に、傷ついていなければならず、命が与えられうる前に、殺されていなければならない。いかなる人間も彼がそのいちじくの葉を取り去られるまでは、キリストの義の衣を見に纏<sup>まと</sup>おうとはしないものである。いかなる者も自分の汚れを感じ取るまでは、恵みの泉によって自らを洗うことを欲しないものである。それゆえに我が兄弟たちよ、我々は律法を、その要求を、その脅かしを、さまざまな形でなされる罪人たちの律法違反を明らかに告げることをやめてはならないのである。』と。これは大事なことです。私たちはついつい「福音は良い知らせだから、良いことしか言わない。耳障りの良いことしか言わない。罪だとか、悔い改めだとか、裁きだとか、地獄だとか、そういうちょっと脅しをかけるようなことは言いたくない。」でも、それを言わなければ、救いの必要性を誰も感じないんです。キリストを信じなければ、そのまま神に裁かれ、そのまま地獄に行くんです。厳しいメッセージです。きついメッセージです。多くの方は、それを快く思いません。聞きたくないと思うんです。「あなたは罪人です。このままではあなたは罪のうちに死にます。そして神から永遠に引き離されるところに、ゲヘナに、地獄に行つて永遠に苦しむんです。永遠の責め苦で永遠に罰せられるんです。真っ暗闇で歯ぎしりするんです。」怖いんです。脅されるようです。でもそれも語らなくてはいけないとスポルジョンは言っています。これを語らないので、多分日本では多くの方は救われたいと思います。「天国にあなた、行きたいですねと。だったらイエス・キリストを信じる必要があります。」それで終わってしまうわけです。罪について一切語りません。地獄もリアルなんです。現実なんです。罪について語らない限り、真の意味で人は自ら救いを欲することはないということです。律法を語らない限り、恵みがいつまでも分からないということです。何故恵みが分からないのか。それは、あなたが律法を知らないからです。罪の自覚がないからです。罪の本質が分かっているからです。いかに自分が罪深い者か、分かれば分かるほど神の恵みに感謝します。もっと神を必要とします。何故救われたいのか。皆さんも考えて頂きたいと思います。あなたは律法を語っていますか。10 の言葉、十戒を語っていますか。これに反する者は全員地獄行きなんです。ハッキリとノンクリスチャンの家族に伝えて頂きたいと思います。十戒、これに反するならば、このスタンダードに見合っていないならば、あなたは神の裁きに服することになる。問答無用であなたは地獄に行くんだと。でも、あなたには罪からの救いが提供されていますよと。イエス・キリストを信じるだけであなたは救われるんです。これこそがグッドニュースです。グッドニュースが真のグッドニュースになるためには、バッドニュースも合わせて伝えなければいけないということです。これは皆さんには何度も私は伝えてきておりま

す。でも私たちは、つつい弱いですから、バッドニュースは語りたくないです。自分が悪い人に思われ  
たくないからです。嫌なこと言う人と。変なこと言う人。厳しいこという人に思われたくないの、良い  
人でありたいので、嫌われたくないの、私たちはつつい律法については強調しません。でも気を付け  
たいと思います。そのままではいつまでも救われないということです。いくらあなたがその人に親切に  
してあげてもです。その人の必要に応じてあげてもです。話を聞いてあげてもです。援助をしてあげても  
です。何故その人は救われないのか。何故その人は教会に来ないのか。あなたが律法を語らないから  
です。

そして **12 節**からです。『私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげてい  
ます。』パウロが、私を強くして下さる方とイエスのことを言っています。これは力を流し込み続けて下さ  
る方というふうに訳すことが出来ます。パウロも弱さを感じていたんです。パウロも強くして頂く必要を  
感じていた。力を流し込んでもらわないと、自分も立てない、続けられない、という弱さ、力不足を感じ  
ていたわけです。でもそんな自分でもキリストは忠実な者と認めて下さったんだと。「だからテモテよ、あ  
なたが弱くてもキリストはあなたを忠実な者と認めて下さるんだ」と。「違った教えをする偉そうな偽教師  
たち。偉ぶっている人たち。人々は彼らを認めるかもしれない。でも人が認めるか認めないかではなくて、  
キリストが認めるか認めないかが大事なんだ」と。最期の日キリストの前に立って、「良くやった。良い  
忠実なしもべだ」と褒め言葉を頂けるか、頂けないかが重要であって、この世であなたが認められるか、  
認められないか、あなたが称賛されるか、称賛されないか、そんなことはどうでもいいと。そんなことに  
心を砕いてはいけない、惑わされてはいけないと。あなたも人に認められようとしていないでしょうか。  
良い妻、良い夫、良いお父さん、良いお母さん、良いクリスチャン、そうなるべきです。でもそれは人か  
ら認められるというものなのかどうかです。神はあなたを良い妻だと思っているのでしょうか。律法も語ら  
ないあなたのことを良い妻と神は言ってお下さるのでしょうか。「あなたは罪人だ。あなたは裁かれる。」そん  
なこと言ったら嫌われてしまう。私は良いお母さんでありたい。良いお父さんでありたい。優しいクリス  
チャンでありたい。変な人と思われたくない。嫌われたくない。人に認めてもらいたい。それがあなた  
の中の思いならば、あなたもまた格別厳しいさばきを受けるということを知って頂きたいと思いま  
す。あなたは知っていたのにそれを知らせなかった。血の責任があなたにも問われるということ。脅して  
るんです。恐喝してるんです。怖いですね、こんな教会もう来たくありませんと思うかもしれませんが、  
でも心配しないで下さい。私は自分にもそのことを語り、厳しいさばきを受けたくないの、このことをハッキリ皆  
さんに嫌われても、皆さんがこれから教会に来なくても構いません。他の教会に行っても構いません。  
でも私は忠実に聖書のメッセージを、真理を語り続けなければいけないので、敢えてこのことを皆  
さんにも厳しく伝えています。あなたは神の目に忠実な者か。忠実な妻か、忠実な夫か、忠実な母か、  
忠実な父か、忠実なクリスチャンであるのか。これは神の目にどうかということが問われている  
のであって、人の目にどうかは永遠には関係ないということです。この地上では大いにあなたにと  
ってはそれは重要かもしれませんが、でもこの地上が永遠に続くのではないということです。人の  
評価が永遠に評価されるのではないということです。この世で認められて、この世で褒められても。  
夫からはあなたは良い妻だと言われるかもしれませんが。でも神からはどうでしょうか。そう  
でなければ、あなたは今日この場で悔い改めなくてははいけません。「罪だとか、さばきだ  
とか、悔い改めだとか、地獄だとか、そういうことを言わないクリスチャンだから、良いクリ  
スチャン、優しいクリスチャンだ」と、そう自分が思われているのが良いことだと思ってい  
るならば、あなたは悔い改めなくてははいけません。

そして **12 節**の続きです。『なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてく  
ださったからです。』で、**13 節**に『私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者  
でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。』  
クリスチャンになる前に、信じていない時に、知らないでしたこと。それは“教会を迫害した”  
ということです。無知な熱心

者はいっぱいいます。かつてのサウロがそうであったように。男も女も縛り上げて、「キリストを信じるなんてとんでもない異端だ、カルトだ」と。知らないでさばいたわけです。私たちもそういうことがあります。知らないでさばく。「あんなキリスト看板をつけるような人たち、とんでもない。あんな凱旋車でスピーカーで近所迷惑だ。彼らと同じように見られたくない。」そうやって私たちは知らないで彼らのことをさばくかもしれません。気を付けたいと思います。私たちは自分が正しいと思っています。パウロも自分が正しいと思って、彼らを、クリスチャンをさばくこと、縛り上げること、それが神への奉仕だと思っていたわけです。熱心だったんです。正しいことをしていると思い込んでいたんです。それはユダヤ教を守るためでした。ある人たちもそれは教会を守るためだと言うかもしれません。でもそうやって私たちも知らないで、自分が正しいと思い込んで、熱心なことをして、そしてあの人もこの人も縛り上げて。「ああどうしよう。私は間違っただけのことをしていたかもしれない。」心配ありません。サウロが復活のキリストによってノックアウトされたように、あなたもきっとノックアウトされると思います。ですから、**14 節**を見て下さい。

『私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。』**15 節**に『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。』本来は、かつてのサウロは教会を迫害したので、もう罰せられて永遠の滅びに至ってはおかしくなかったわけです。地獄行きがふさわしかったわけです。にもかかわらず、そのさばきを免れて、今度は恵みによって、キリストのしもべとして、使徒として召されていったわけです。そんなパウロの中にあつた自覚は、「私は罪人のかしらです」と。“かしらでした”じゃなくて、“かしらです”という、過去形ではなくて現在形が使われています。これが神に用いられる者の姿です。教会のかしらは、キリストであります。とかく教会の指導者は、自分が教会のかしらになろうとします。でも私たちは神に用いられたいならば、教会のかしらになる必要はありません。教会のかしらは、もうおられるからです。もう決まってるからです。それはイエス・キリストであります。私たちが目指すべきは、“教会のかしらになること”じゃなくて、“罪人のかしら”になることです。それは勿論誤解しないで下さい。肉欲にふけて、やりたい放題、じゃんじゃん罪を犯すという話ではなくて、むしろ“罪人のかしら”である自覚を持つということです。へりくだるということです。パウロも自覚していたんです。「私は決して誇れるような経歴を持っていない。敢えて恥を忍んで、自分がどんなにひどいことをしてきたのか、どんなに間違っていたのか、どんなに愚かだったのか、どんなに高慢だったのか、そのことを正直に告白して、そんな私でも救われ、そんな私でもキリストの使徒として召されたんです」と。“私こそが罪人のかしらです”、これは霊的に成長している者の印です。成熟度を表す言葉です。逆説的に聞こえるかもしれません。神は光です。その光に近づけば近づくほど、クリスチャンは自分の影の長さに驚きます、ショックを受けます。クリスチャンになって聖書を学べば学ぶほど、自分がどうしようもない、救われ難い罪人だったのか気付きます。こんなにひどい奴だと思わなかったと。内に住む聖霊もそれを促します。聖書には『義人はいない。ひとりもない。』だれもが罪を犯しているから、罪人であることは明らかになってます。でもその自覚がクリスチャンになって、成熟すればするほどもっと深まって、もっと強まっていく。これは罪悪感が募っていくという意味ではありません。なぜならば、すべての罪人は赦されているからです。でも罪の自覚は健全な意味であなただけをへりくだりに導きます。「私はそんなに偉そうな者じゃない。そんな一角の人物。とんでもありません。どうして私のような者が救われたのかも分からない。どうして私のような者が神に用いられているのかも分からない。私はただの罪人です。しかも、罪人のかしらです」と。そういうへりくだった者が、神に用いられます。神に持ち上げられるんです。聖書にも『神は高ぶるものを退け、へりくだる者に恵みをおさずけになる』と、言われてます。高ぶっているあいだは、絶対に恵みが分かりません。高ぶっているあいだは、決して神には用いられません。自分がまるで教会を牛耳っているような、教会を守るような、かしらであるかのような自覚を持

っている人、そんな人は絶対に神に用いられません。むしろ「私は罪人です。何も分かっていません。何もできない者です。かえって自分でしたくないことすらしてしまう。そんな弱い愚かしい者です。でも、神はこんな罪人のかしらを用いてくれます。私のかしらは、教会のかしらイエス・キリストです。この方が私を召して下さいました。この方に私は命令を受けているんです。だから私はこの方の責任の下に働いてるんです」と。パウロが、“目からウロコ”の改心の体験をして、**第1コリント15:8, 9**でこう告白しました。救われたばかりのパウロの言葉です。『そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現れてくださいました。私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。』使徒の中では最も小さい者、使徒と呼ばれる価値のない者。これが、救われたばかりのパウロの認識でした。パウロの自己認識ということです。それから5~6年経ってから、自己認識または自己評価が変わりました。改心から5~6年経ってからです。**エペソ3:8**『すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に』。改心直後は、“使徒たちの中で一番小さい者”という自覚を持っていましたけれども、でも信仰歴を重ねて光に近づけば近づくほどパウロの自己認識、自己評価は変わっていったんです。“使徒たちの中”じゃなくて、いや、“すべての聖徒たち”。クリスチャンたちの中で自分が一番小さいんだという認識。で、それから2~3年経って、最晩年を迎えて、パウロは**第1テモテ1:15**で『私は罪人のかしらです』と。成熟すればするほどです。信仰歴を重ねれば重ねるほど。神に近づけば近づくほど。罪人である意識をあなたは痛感するはずですよ。もしあなたが信仰歴を重ねても、罪人である意識を痛感していないならば、あなたは全然成長していないということです。このことも吟味して頂きたいと思います。森永製菓の創業者の森永太一郎という人は、晩年になって「我は罪人のかしらなり」というのぼりを持って、全国行脚したそうです。一人ひとりに頭を下げて、この白髪頭に免じてイエス・キリストを信じて欲しいと。森永製菓の創業者が、そうやって自らを“罪人のかしら”と称して、宣伝して周ったわけですよ。のぼり竿を持って、頭を下げながら、いい年してです。自分が罪人のかしらである認識を持っている者はまさにそのように上から目線じゃなくて、下から目線で福音を語るわけですよ。イエスは罪人を救うために来た。この私を救うために来たんです。この私が救われたならば、あなたも救われます。こんなひどい、どうしようもない罪人のかしらの私が救われたのであれば、あなたの家族も救われるはずですよ。

で、これはノンクリスチャンに対して言われているだけじゃないですよ。文脈から見ると**15節**の『「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。』ということは、この罪人を救うためのこの罪人の中には当然パウロも含まれているわけですよ。つまりクリスチャンは、今もイエス・キリストによって救われる必要がある。これは永遠の地獄から、滅びから救われるという意味ではなくて、ありとあらゆる人生の局面から救われ続ける必要がある。テモテもそうだったということです。「テモテよ、あなたもイエス・キリストによって救われ続ける必要がある。」あなたを、私を、今もイエス・キリストは救い続けて下さる。このことを皆さんも知って頂きたいと思います。今あなたは、生き地獄に見舞われているかもしれません。自分の手を加えた問題に、もう屈しようとしているかもしれません。もう駄目だと。袋小路になっているかもしれません。袋小路に今追い詰められているかもしれません。それでもイエス・キリストは罪人のあなたを救って下さる。でもあなたはパウロと同じように、自分が罪人であるという自覚を持たなくてははいけません。私こそが罪人である。「あの人も悪いけれども」じゃないんです。「私こそが悪いんです」と。「あの人よりまし。」比較をしている限りは、あなたはへりくだっていませんから、神の恵みを受けることは出来ません。「でもあの人も。」確かに神様は罪を犯した者に対してちゃんと正しくさばきをつけて下さいます。でもそれはあなたのビジネスじゃないんです。あなたはどうなのか。あなたは神の前にどうなのか。全身全霊をもって神を愛していないならば、あなたは紛れもない、どうしようもない罪人であるわけです。人なんかどうだっていいんです。人があなたにどんな罪を犯したか、そんなことはハッキリ言って

どうだってよくなるわけです。もし自分の罪がハッキリ分かるならば、人があなたに対してしたことなど、さもないことです。話題にも上がらないことであるはずですが。そのような自覚を私たちが持つならば、神はあなたを喜んで救って下さいます。今も救い続けてくれます。自分で自分を救おうなどと思っはけません。そういう人は必ず行き詰まります。テモテもそう思っていたんです。だから「もうエペソにはとどまれない」と思ってしまったわけです。でもパウロは、「私は罪人のかしら。この私が救われたならば、あなたも救われるはずだ」と。へりくだるように。「あなたが教会のかしらじゃない。確かにあなたは牧師として、監督として、重い責務に与かっている。でも教会のかしらは、あなたじゃないんだ」と。「この家庭のかしらはあなたじゃないんだ。この会社のかしらはあなたじゃないんだ。あなたはただの罪人のかしらだ」と。だからそれにふさわしく、キリストに救っていただくように。その自覚を持つならば、キリストがあなたのかしらとなってあなたを救いあげるだけじゃなくて、あなたを救い続け、そしてあなたをもう一度キリストにふさわしいものと変えて、キリストのふさわしい働きに与らせて下さる。「奮い立つように。あきらめてはいけない。投げ出してはいけない。」励ましてるわけです。

16 節では『しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。』見本、お手本、模範ということです。この私が救われたのであれば、この罪人のかしらであるこんな私が救われたのであれば、あなたも救われる。あなたの家族も救われる。あの上司も、あの部下も、あの憎らしい人も、あの頑かたく々な人も救われると。誰でも救われるという話です。

で、17 節で、『どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。』“命じる”という言葉は王の勅令であると言いましたから、ここでも『王』という言葉が強調されてます。いつの時代でも最高権威者、王の王はイエス・キリストであります。あなたのボスはイエスです。あなたの上官はイエスです。あなたの上司はイエスです。あなたの夫はイエスです。この教会のかしらはイエス・キリストです。そのことを忘れてはいけません。

で、18 節で『私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。』4 章 14 節にもこのことは触れられております。『長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。』テモテは自分に対する神の召しを少し疑ってしまっていたわけです。先に触れたように、「違った教えを、新奇な教えをして、人々はどんどんそちらへなびいていく。私はどんどん追い込まれていく。プレッシャーのかかる仕事をしている。パウロと同じようなことは出来ない。パウロと違ったことを教えなければいけないのかな。」いろいろな迷いが出たわけです。神の働きを担えば、必ずサタンの妨害もあるわけです。神の祝福のあるところに必ずサタンの呪いがそこに伴うわけです。でもそれもこの預言という、神が確かにテモテを神の働きに召したという、この召命の言葉、勅令の言葉、この確信に立つならば、あなたは惑わされることなく、ブレることなく、どんな反対にあっても、雲行きがどうであれ、あなたは自分の召しに従って、あの預言の言葉に従って、それを胸にあなたは忠実に淡々と神の働きを担えばいいんだと。具体的には、神の言葉をそっくりそのまま、ありのままに語り継ぐということです。父から子に語っていくようにです。

で、19 節、20 節。『ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。その中には、ヒメナオとアレキサンデルがいます。私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。』“信仰の破船”という言葉は、信仰を捨ててしまった者の姿を表しています。第 1 テモテ 6 : 20~21 にもそのことが触れられています。『テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「靈知」と呼ばれる反対論を避けなさい。これを公然と主張したある人たちは、信仰からはずれてしまいました。』これが破船ということです。具体的な名前も

実名を出してます。名指しで言ってます。ヒメナオとアレキサンデル。ヒメナオの名前は**第2テモテ 2：17**にも出て来ます。アレキサンデルの名前も**第2テモテ 4：14**にも出て来ます。彼らがどんな罪を犯したのか具体的に書いてありません。ただパウロと違った教えに惑わされていたことは間違いありません。彼らが実際にそれを説いたのかもしれませんが、その教えに従ってやってはいけないこと、言うてはいけないことをやっていた。誤った教理は、誤った生活へと私たちを導きます。ですから正しい教えを学ぶ必要があります。正しい教えは正しい生活へ私たちを導くものだからです。いずれにしてもこのヒメナオとアレキサンデルは、悔い改めることを拒否したんです。パウロの説いていたこと、それをそのままそっくりテモテが引き継いで教えていたことに対して、素直になれなかったんです。教えを拒み、悔い改めることを拒み、その違った教えを信奉することを選んだわけです。その結果、彼らはサタンに引き渡されるという、いわゆる教会の戒規に従って除名処分を受けたわけです。サタンに引き渡すというのは、非常にショッキングな、強烈な言葉ですけれども、間違わないで欲しいと思います。これは断罪目的で言われていないということです。むしろ、破壊目的ではなくて、建設目的であるということ。“彼らに学ばせるため”とあります。この“学ばせる”というのは、“懲らしめによって学ばせる”ということです。子供のしついで言うならば、言うことを聞かない、何度も同じことを言っても言うことを聞かない、その子供にスパンクをする、尻を叩くということです。**第1コリント 5：3～5**にこのサタンに引き渡すということが、コリントの教会にも言われて、それが実践されていたことが分かります。『私のほうでは、からだはそこになくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。』ここでは、実際にサタンに引き渡すというのは、教会から除名されて、場合によっては肉体が滅びる。死ぬこともあるということです。でも、死んだとしても霊が救われるならば、そこには意義があるわけです。滅ぼすためじゃないんです。断罪するためじゃないんです。破壊目的じゃないんです。悔い改めるため。悔い改めない者を悔い改めさせるため。懲らしめによって学ばせるため。教育目的でこの除名ということが行われます。救いを失うということはありません。救われているならば救いを得る。救われていないただの“自称クリスチャン”ならば、余計であります。もしこの除名処分がなければ、自分は救われているつもりで、天国にいくつもりでいたのに、気がついたら地獄に墮ちていた。これほどの悲劇はありません。ですから、あわれみから言ってるんです。厳しいことを言うんですけれども、これはあわれみです。その人が本当に救われていないのならば、ただの“自称クリスチャン”ならば、そのまま地獄に行くんです。天国に行くつもりだったのに、ここは天国かと思ったら地獄だった。これは悲劇です。そういうことが無いように。

C・S・ルイスはこう言いました。『悔い改めることなしに、「あなたのもとに引き返らせて下さい」と、神に求めるのは、引き返すことなしに「引き返させて下さい」と求めるのと同じなのである。』矛盾した話ですけれども、こういう矛盾したことを多くの人たちがやっております。「悔い改めることなしに、引き戻して下さい」と。悔い改めなければ、あなたは引き戻されないんです。悔い改めないままで、天国に行けると思ったら大間違いです。パウロはこのことをテモテに堅く命じました。これはエペソの教会の群れを守るためでもありました。狼が荒らしてるんです。それを守るためにも、テモテはこういう厳しい処分をしなければいけなかったんです。弱気になっていて、とてもそんな除名なんか、あんな影響力のある人たちに、なんて躊躇していたと思われまます。でもパウロは名指しで、このヒメナオとアレキサンデル、この二人を除名処分せよと、ハッキリ言ったわけです。そんな、名指しでとんでもないと皆さん思うかもしれませんが、群れを守るためには白黒ハッキリさせなければいけない時があるわけです。これも牧師の重要な働きです。厳しいようですけれども、それは救われるため、悔い改めることができるため、神に立ち返

ることができるための処分ですから、大いになされるべきことです。そして他の群れも悪い影響を受け続けて、惑わされて、間違った方向、永遠の滅びに至るようなことになれば、これは目も当てられない悲劇ですから、群れを守るためにも早めに処分して去る必要があるわけです。勿論これは容易に、安易にすべきことではありません。重重、先ず本人に対してイエスの教えに倣って、マタイの18章にあるように、先ず罪を犯しているその兄弟のところに行って直接告げるわけです。それでも聞かなければふたりか三人の証人によって、それでも聞かなければ教会に告げなさい。それでも聞かなければ、取税人や異邦人のように、遊女のように扱うように、要するにノンクリスチャンとして扱うように。ノンクリスチャンはクリスチャンではないからという扱いをするわけです。でもノンクリスチャンはイエス・キリストによって救われるわけです。祝福に満ちた神の栄光の福音によって、どんな罪人でも救われます。14項目あがっているような罪を犯している、そんな罪人でも福音には人を救う力があります。ローマ1:16にも福音には人を救う力があるとハッキリ言われてます。「律法は人を救えませんが、福音には人を救う力がある」と、パウロは言ってます。あなたが何者でも、どんな罪人でも、自称クリスチャンでも、福音はあなたを救う力があるんです。「このことをもう一度信じて、テモテよ、この福音をストレートに語りなさい。律法も合わせて語るように。そうでなければ福音は“福音でない”から」と。今日はこれで時間が大分過ぎてしまったので、終わりたいと思います。1章を何とかカバー出来たので、次に2章にこれから進んでいきます。もう大体序論も含めて教えましたので、またしっかりとどういう人に、どういう事情で、どういう時期に語られているのか。これらもすべて皆さんも心に留めて頂きながら、この牧会書簡『テモテへの手紙』を他人事としてではなくて、自分のことも照らし合わせながら、そして私たちの教会のことも重ね合わせながら、この手紙と一緒に学んでいきたいと思っています。